

# オフエイロン全集を訳して

キーワード：ショーン・オフエイロン/修正主義/アイルランド短編小説

風呂本 武敏

## (1) 全集のまえがき

1) 各巻まえがきで若干の伝記的事項と30年代の短編小説(第1巻)、短編小説論は<sup>ヴェリシミリュード</sup>真実らしさの大切さと最初から出来上がった逸話よりも偶発性の強い<sup>インシデント</sup>挿話を重視した作風の強調(第2巻)、記憶からの呼び出しに応える様々な多様性(第3巻)、メタノヴェルの思考実験の文体と小説作法(第4巻)などを述べた。

伝記的要素として生い立ちには、父母の影響が強いのは当然である。ポール・ディレイニーはオフエイロンの初期人格形成の自己規定に「<sup>ロイヤリスト ナショナリスト ミドル・クラス カトリック・サブジェクト</sup>王党派、国粋主義、中産階級、カトリック臣下」を挙げている。(Delaney, 25)

その後1913年アイルランド義勇軍 The Irish Volunteers (これは同年の交通ストの労組防衛組織として作られた軍事的組織)に加わり、1918年後半の独立戦争時(1919-21)IRAに参加したが、父の<sup>ロイヤル・アイリッシュ・コンスタブル</sup>英国アイルランド警察の経歴が仲間に疑惑を呼んだ。1921年12月「英愛条約」で、南北分離独立が成立したが、共和国内ではIRA多数派が条約反対に回り(オフエイロンもそれに従い)1922年6月の総選挙で多数を占めたゲール党(のちにフィネ・ゲールと改称)に対し、デ・ヴァレラを含めたシン・フェイン党と議会派は21-22年にかけて1年余武闘を続けた。この内乱時代にオフエイロンはコーク大学にあり、IRAの南方方面第1分隊広報部指揮官(later 1922)、次いでシン・フェイン党の広報副官(mid 1923)、さらに同指揮官(夏 1923-1月 1924)に昇進。その後<sup>コモンウェルス・スカラーシップ</sup>英連邦奨学金を得てアメリカのハーヴァード大学に留学(1926-9)。英国帰国(1929-33)。次いでアイルランドに戻る(デ・ヴァレラは1926年議会復帰を宣言し、フィアナ・フォール党を結成。1932年首班になる)。(Delaney, 17-32)

オフエイロンのゲリラ戦経験による作品は主に『真夏の夜の狂気』に収められているが、ジョン・グラントはその中の「<sup>フーガ</sup>逃避行」について興味ある指摘をしている。これは英国警察遊撃隊との戦闘となっているが、実際は21-22年の内戦時の政府軍との戦いに基づいていること、その変更にはある個人的感情の隠蔽が作用しているという。オフエイロンにとっては対英国警察には同情や良心の呵責は少ないのに対し、内戦では同じアイルランド人同士の殺し合いと言う悲しみや苦しみは抜けきれなかったというのである。

John Grant; “I Was Too Chikinhearted to Publish it” (Sean O’Faolain, Displacement and History Re-Written, Liverpool Hope University) (17, March 2017)

後のレヴィジョニズムのところで述べる、事実と架空化の問題はその距離の取り方で異なった評価が生まれるが、それはまた、事実と物語のどちらに力点を置くかの歴史観ともつながってくる。

2) ロレンス・ウィリアム・ホワイトはペダー・オドネルと *The Bell* 誌の発刊からオフエイロンの参加を論じている。同誌は14年間に131号(1940-54)を数えたが、デ・ヴァレラの強権政治のもとで、文化の自由と少数者の権利を守る良心の声の役割を果たした。その雑誌の発案者オドネルは労働組合、教員組合、共和主義者会議<sup>リパブリカン・コンGRESS</sup>などの組織経験あり、IRAにも加わった。また社会民主党系の機関紙 *The Irish Democrat* にもつながりがあった。折からデ・ヴァレラの1937年憲法が施行され、どのような国を作るかが議論になった。ここで議論の中心になったのは以下の4点である。

- 1) Republicanism 再定義、Republican Congress の消滅
- 2) スペイン内戦をめぐるホットな議論
- 3) 憲法施行のデ・ヴァレラの支配
- 4) アイルランド共和主義における実力行動の問題

ブルジョア支配の共和主義と実力行動派も共和主義を名乗った。

この中でのオドネルによるオフエイロン編集者の招聘は1940年の当初からであった。それまでのオフエイロンの主張の、自由主義、知的啓蒙主義、国際性などとオドネルの考えていた協調的な共和主義が一致を見たからであろう。

(Lawrence William White; Peadar O'Donnell, 'Real Republicanism' and *The Bell The Republic* issue 4, June 2005)

### 3) ファシズム vs 反ファシズム

スペイン内戦(1936-39)の共和派政府支持のアンケートに答えたオフエイロンの回答はそれまでの民主的言動に照らしていささか失望であった。

(Questionnaires ; *Authors Take Sides on the Spanish civil War* (1937) Lady Nancy Cunard, W.H.Auden, Stephen Spender)

このアンケートは英米の200人の著名者に送られ、返答は147名。これらをキュナードは3種に分類して発表した。(キュナード汽船の家庭の娘ナンシーをオズワルド・モズレイの友人だった母親はいち早く廃嫡にしていた。)(1931)

### ‘共和政府支持’ 127

#### ‘中立’<sup>ニュートラル</sup> 16

H.G.Wells, Aldous Juxley, Ezra Pound (deeply involved in the Italian Fascist party)

T.S.Eliot

「私は性分として同情心の篤い人間であるが、それでもなお確信していることは少なくとも少な

からぬ文学者は沈黙を守るのがいいと思う。」

「左翼とは違って、問題をそれて、エリオットがここで提供するものは彼がキリスト教に改宗して1927年アングリカン教会に入信して以来発展させてきた<sup>クリドゥ</sup>信条、つまりアングリカン教会神学の教義の中<sup>ヴァイアメディア</sup>道である。」というコメントもある。

Sean O’Faolain

「多数派の愚か者になるなかれ。XとYがZのことで互いに殺しあうとしても、どうしてX.Y.Zの説く理念を信じない人々までどちらかを選ばなければならないのか。お知りたいなら私の考えはファシズムは卑劣だとは思わないのだ。あなた方の共産主義だって、卑劣だよ、もっとそうだ。ただこの世にはそのどちらかの他にも理念があり、ありがたいことに、(あなた方の誰も信じないものではあるが。)」

後生だから芸術家が有能に値する芸術家なら常にそうあるべきもの、個人主義者でいようにする気力を持ってなくする固定化からは自由であってほしい。  
(あなたのご住所はとても気に入りました。)皮肉を込めて。

## ‘ファシスト支持’ 5

Evelin Waugh, Edmund Blunden, Eleanor Smith, Ruby Ayres, Norman Douglas

後から考えてみると、このオフエイロンの一種の過剰反応には、スターリニズムの粛清(キーロフ暗殺に端を発し共産党指導部内や軍部内の反スターリン政敵大量粛清1936-38)やスペイン共和派内の共産党とアナキストの武力衝突、少し後に顕わになるアイルランド政府のナチにたいする中立政策(大戦中1939-45)的風土なども影響があったかもしれない。デ・ヴァレラの中立政策の是非については大戦後も戦犯判決の出た在アイルランドのドイツ大使 Dr. Eduard Hempel を訪問してヒトラーの死のお悔やみを述べたり、戦中にアイルランド軍を脱走し英軍として戦った4000人兵士を脱走のせいよりも英軍として戦った罪で裁いたこともある。(市民では8万人が英軍に参加。)彼らの活動はアイルランドの公式の記録から2006年ごろまで消されていた。またフランコ支持の十字軍として Eoin O’Duffy に従い700人が従軍し、1か月ほどスペインにいたが10人足らずが戦死、他方共和国支持の国際義勇軍のアイルランド人は300人でそのうち1936年から1938年までの間に60人戦死。

Brian Girvin; De Valera’s Diplomatic Neutrality (*History Today* 56, March 3, 2006)

スペイン共和政権の合法性を覆す軍部クーデターのフランコ側には王党派・最大の地主のカトリック教会や大資本家がつき、独伊ファシスト政権も公然とこれを支持した。このようにアイルランドの政治的風土は複雑で、オフエイロンの皮肉な態度の真意は測りにくい。オフエイロンの皮肉の中には専制的性格を強めていたデ・ヴァレラ体制と、アンケートによって多数派意見を強制する怖れのあるアンケートの全体主義的性格への反発もあったかもしれない。にもかかわらず、その後のナチの凶暴性を見通せなかったことと、スターリニズムの反民主主義を天秤にかけ、前者を免罪にする理

由は必ずしも人を納得させない。事実、21世紀になっても、反ナチ闘争でスペイン内戦での共産党の方針がファシスト進撃を食い止める大きな力になったという論調が発表されることもある。(Eric Hobsbawm; War of Ideas, *The Guardian* 17 Feb. 2007)

「兵士として共和派で戦った大部分はバクーニンよりマルクスの方が妥当であると理解した、たとえ幾人かの生き残りの人々は絶望と憤慨を伴いつつ解放のアナーキスト的局面の自然発生的・非効率的ユートピアを回想するにしても。」) オフェイロンの不十分さを単純に批判するよりも、英国植民地支配の過酷さやデ・ヴァレラ政府の後進性の条件の中で歴史的判断は直情的ではなく可能な限り時間をかけて見えてくるものを考慮に入れる必要がある。

#### 4) *The Short Story*, story telling の伝統

我々の訳書 第1集まえがきで述べたように、オフェイロンとオコナーの比較はアイルランド短編小説の二つの特徴の理解に大いに役立つ。オコナーは孤独な人生の孤独さを象徴する事件を描くのに対し、オフェイロンは目覚ましい事件よりも事件と事件の間に隠れた真実を探る。また「語り」の伝統を引き継いでいることや「喜び」<sup>プレジャー</sup>を重視する視点なども幾度か繰り返される。これらの発言は創り人と受け取る人相互の視点を視野に入れたもので、一つの活動の内面的・社会的文脈を考慮したものとして、先の *The Bell* 誌の編集方針とも直接つながる。

もう一つの評論 *The Irish*, 『アイルランドー歴史と風土』(橋本楨矩訳 岩波文庫)も幾つか重要な問題提起がある。ここでもオフェイロンのテーマともいえるべき「反逆者(Rebel)」はキーワードである。彼は典型的アイルランド人6種類に新農民(ゲールの貴族に所有された農民が借地農とは言え金納地代で一定の自由を獲得するようになって以後)、アングロ・アイリッシュ、反逆者、司教、作家、政治家を考える。彼らは歴史を反映した典型人物として、多くは、雄弁・多弁を特徴に有しており、そこには「語り」の教育の実践的課題が隠されている。のちの述べる歴史を「物語性」の面でとらえるオフェイロンの特性の一つがここにある。

ついでながらアイルランド研究から派生した日本における応用例を一つ上げておきたい。荒木・竹本ほか『語り継ぐ力』(アイルランドフューシャ奈良書店)、本書はいわゆるアカデミックな従来の方法とはいささか異なる伝統の開拓として興味がそそられた。イエイツとグレゴリ夫人が行ったアイルランドのコノハト地方の民話採取を思わせる。視点はアイルランドと日本の神話・民話の伝承に類似性を見て奈良の生駒山谷に息づいている信仰を掘り起こす作業を続けるのと、語りの伝統を学校教育に根付かせる試みである。講演会、インタビュー、アンケートなどから次のステップにどう進んでゆくのを見守りたい。文学作品の実践課題は作家にとってもうれしい収穫ではないか。お話をきくのが言葉への関心の始まりと言う教訓がある。アイルランド神話・伝説は様々に繰り返される文学作品の土壌となっているのは言うまでもない。cf. 南部黒人の家庭では台所で母が子供に民話を語る。

#### 5) 伝記的関心

*The Story of Eamon De Valera* (1933) revised (1939) Constance Markievicz, Daniel O'Connell,

Hugue O' Neill いずれも独立の歴史で殉教や英雄崇拜の対象となった人物である。その選択自体がレヴィジョニストの批判の対象となる可能性はあった。また自伝『我が人生 (Vive Moi)』ではそうした関心の所在についての反省も豊かに語られる。

1930年代の特徴の一つにルポルタージュの流行がある。時代の変化の大きさ・速さの記録と言えるがオーウエル『カタロニア賛歌』もその一例。オフエイロンも旅行記を書き、IRA時代のエピソードはゲリラ戦の記録。正規軍の作戦に比べ個人的・地域的・即断的旅行記もそれに近く、報道的、事件性追求型である。(cf.『南イタリアの旅』)

またこの時代に考案され mass-observation の技法は、同一事件の多角的観察である。同一性と多様性の実証として一考を要することも指摘しておきたい。第二次大戦のドイツ軍v2 ロケットによるロンドン空襲の記録にその一例がある。

## (2) 七年間で学んだこと

### 1) オフエイロンの変身

オフエイロンは二度のわたりデ・ヴァレラ論を書いたが、最初のものは独立戦争時代の指導者としてのデ・ヴァレラにまつわるエピソードを中心に英雄崇拜、カトリック的殉教心などに彩られていて、後年オフエイロンは「くず」と評している。第二のものは政権奪取後のデ・ヴァレラの変身、つまり *The Bell* 誌によってオフエイロンが戦った、強権主義・カトリック教義の支配批判の立場を明らかにしている。無知な女性支配のための反性教育、避妊、堕胎、離婚禁止、あるいは検閲制度による出版の自由、思想統制などである。もちろん国内事情の変化でデ・ヴァレラ政権も徐々に変質したが本質的には農業国の構造維持のため経済的国粋主義を守ろうとした。

先のディレイニーは1930年代の風土を「爆発寸前の今日」、「資本主義の危機、全体主義の台頭、第二次大戦への傾斜」(Delaney, 25)と述べているが、オフエイロンのリアリズム的視点には客観的展望と国際的視点がバロメーターであり、当然スペイン内戦や国際義勇軍の問題も意識には入っていたであろう。その問題意識はオフエイロンの従来のスタンスの反権力・反大衆迎合の二面の戦い、啓蒙主義・反衆愚政治と矛盾するものではなかったはずである。ディレイニーは言う、「反植民地、表現の自由、歴史学方法論、教会・国家間関係、環境近代化における伝統的モードの重要性などにオフエイロンは発言・介入した。」(Delaney, 30)

またケントも当時のアイルランドの風土について、述べている。

オフエイロンは、アイルランドは世界的事件の流れと知的発展の流れに巻き込まれず、澱んだ水になったことを指摘し、<sup>アイソレイショニズム</sup> 孤立主義、<sup>ゼノフォビア</sup> 外国人嫌い、<sup>ショウヴィニズム</sup> 国粋主義などの混淆を批判した。(Kent ed., xviii)

## 2) Revisionism

「修正主義」と言うのは日本ではあまり良いニュアンスで使われていない。正統的・伝統的思考に修正を加える、変更ではなく元の流れを承認しつつ部分的改良を主張するに留まっている。それは統一を重視するマルキスト・イデオロギー（社会学・哲学論争一般でも）の論争の中で分派批判の悪罵に使われたこととも関係している。実践的活動と結びついた効率重視のイデオロギーにあっては無理からぬ傾向であっても、歴史的修正主義では常識的には過去の支配的思想が時の変容につれて修正を余儀なくされていくのはごく自然である。アイルランド史では、「正統」と目される歴史が、社会の多数派の政治支配を様々な形で反映したものになっていた。南の共和国では独立闘争の中心であったデ・ヴァレラが体制の主流となりカトリック教義を取り入れて、思想・信条の自由に制限を加え、憲法にその家父長的性格を反映して公的・私的に女性の権利を圧迫した。北では英国憲法の影響はあるが、多数派を占めたプロテスタントの政治支配が市民生活の中に宗教的差別を温存した。このような状況に対して異議申し立てと文化の多様性の要求から、より客観的理念を反映した歴史要求が登場した。経過の細かい議論は省略するがオフエイロンは特に *The Bell* 誌編集を通し、また伝記的関心の成果であるデ・ヴァレラ論、マーキエヴィッチ論などで、このレヴィジョニズムの先駆となったが、その英雄崇拜神話の危険にも気づいていた。

- a) 反植民地闘争に同調するも、アイルランドのそれに固執する偏狭性には反対し同じ植民地闘争の中東やアフリカのそれとの関連も見る視野の拡大を主張。また公正の原理<sup>フェアネス</sup>を重視した。
- b) 偏狭なカトリック中心主義に賛成せず、例えば *The Bell* 誌をプロテスタントの作家にも開放。Elizabeth Bowen と The Big House のテーマ。
- c) 偏狭なレヴィジョニストの科学的真実一本鎗にも懐疑的。

これには彼の反デ・ヴァレラ闘争からの後退の批判もあるが、そこには文学的想像力の問題と事実の含む資料性・歴史と物語の協同性の問題も含まれる。歴史的事実も意義の大小と共に取捨選択の必要があり、統一的社会像を作る過程は単純に客観的だけの基準に限定できない。

Alfred Markey; Revisionisms and the Story of Ireland: From Sean O'Faolain to Roy Foster *Estudios Irlandeses*, no.0, 2005

マーキーは Ronan Fanning のアイルランド歴史学会会長挨拶の科学的学問研究とアイルランド史の物語性の中の神話づくりの傾向の二つに対し、より史実に厳密である伝統の重視を主張し、前者の流れに3世代の学者 T.W. Moody, F.S.L. Lyons, Roy Foster を挙げた。この二分法では大衆文化的物語史に分が悪いのは明らかであるが、マーキーはレヴィジョニストの中にも多様性が含まれていること、フォスターの『アイルランド史物語』自体にも、あらかじめ予想されたパターンが含まれていて、それにはフォスター自身の言葉で「除外と包含 (exclusion, inclusion)」の重要性を認めているという。物語史には英雄の神話化とその列伝を中心とする傾向がある。これはまた最後に1916年の武装蜂起の大義の評価に絡むつとめて今日的な問題も含まれている。「北」における

1998年和平合意でもIRAの武闘の評価は問題となった。

マーキーはオフエイロンの歴史への歩み寄りを次のようにまとめている。「オフエイロンには物語・歴史・文化・伝統の境界の固定化を嫌い、異端を奨励し過度の党派性への健康な不信感がめだっている」。またこの議論で「たまたま記録された一群の歴史的事件だけでは物語にならない。それらが歴史家に提供するのは物語の要素に過ぎない。事件は、それらの内のあるものの消去や軽視によって、性格付け・動機表出・語調や視点の変化によって、それらの事件は物語にされる。」の引用もある。Gearoid O Tuahaigh; “Irish Historical ‘Revisionism’: State of the Art or Ideological Project?” (Brady ed., 306-32)

またマーキーによればフォスターは客観性、実証性の主張にもかかわらず、Alice Taylor(1938-1988年ころベストセラー小説)がBrian Frielより多く論じられ、自身も『アイルランド史物語』の名を用いながら、先行のオフエイロンの*The Story of Ireland*への言及は少ないと指摘する。また自由国成立後の数十年間の同時代の代表的な雑誌*The Bell*と*Irish Historical Studies*を挙げつつも、後者の学問的誠実さを称揚し、前者は後景に押しやられているという。これはフォスターの主張にもかかわらず、彼の『アイルランド物語史』がそれなりにプロテスタントの偏りを含んでいることを示していると指摘する。そしてマーキーはオフエイロンのベル誌における公正さと開放性に倣い異なった党派性を抱えつつ相互に意見を語り合う広場の建設を見習うべきレヴィジヨニストの存在を証明する時だと結ぶ。(Estudios Irlandeses, no. 0, 91-101)

社会情勢やデ・ヴァレラ体制の変化に応じたオフエイロンの軟化の理由について先のケントは1950年代後半までにアイルランド社会に一定の自由化が進んだことを挙げている。1) 検閲委員会が保守性軟化、2) 新経済政策で外国に市場開放、3) カトリック教会が第二ヴァチカン会議(1962-1965)の結果多少の改革令を出した、4) アイルランドが国連加入(1955)、ヨーロッパ経済共同体(ユーロピアンユニオンの前身)1973年に参加、5) 人口動態の変化で政策変更を迫られた、一(1960年代、70年代)、都市化、公民権運動、学生運動、女性運動、北の「紛争」再燃。(Kent, xxvii)

さらにケントは言う、

オフエイロンの作品に当てはまるレヴィジヨニズムの意味で、ポール・ドイルの「<sup>アクセラレーション</sup>加速化」と言う考えの意味は大文字で書かれた「近代化」\*を言う。そして1950年代以降オフエイロンの論争的文章は減少傾向にあるという文脈はアイルランド研究の分野での彼の位置が幾分霞んでいることを示しているという。オフエイロンがアイルランド国粋主義の否定的側面を取り上げたことでは賞賛されるが、彼のモダニスト的雄弁は国粋主義的側面の持っていた幾らかの価値を犠牲にして土着の伝統を性急に脱ぎ捨てたとみなされる。さらに国粋主義の保護貿易主義的側面に対する攻撃は意識するしないはともかく1960年代以来アイルランド社会に強まってきた激烈な消費主義と超巨大資本主義への道を地ならしする助けになったことも指摘する。(Kent, xxx)

\*Paul A. Doyle; *Sean O'Faolain* (Twayne 1968)より引用

オフエイロンは終始一貫して、知的訓練、啓蒙主義の味方であり、その意味では一時のIRA武闘路線に関心を抱いたとはいえ、*The Bell*の頁の主張では事実に基づいた正確な知識を主張し

た。マーキーの別の論文の次のような主張はこの文脈で相応しい。

*The Bell* に於けるように、オフエイロンは、「事実」によってあるいは普遍的権利の比較的固定された枠組みと語彙によって、進歩・福祉の実証的資料と指標の援用によって提供される新たな可能性を評価する。たとえ彼が抵抗の立場と同時に、世俗的あるいはサイド的語句の「文献学的」立場と言うものは、オフエイロンやその中間たちが逆説的にしばしばその直接の受益者となる透明性がそうであり、事実の実証的観念から客観的真理に「移行する」ときの常套的手法である。「これはオフエイロンの公共的知的参加において驚くほど首尾一貫して我々が見出すキー・パターンに思える。」そしてオフエイロンは抵抗力として「テロリズムの語彙」を使うときでも、人権と人類の進歩と言う全体的な物語の力に常に訴えかける。これはサイドの『哲学への回帰』の主張の文学への信頼と同じであるとマーキーは言う。つまり、文学、最も広い意味での美学が、サイドの世界観、彼の自我意識、彼の信念である文学と芸術の潜在的力の批判的理解が、解釈の優位性を越えて、語りの様態で、個別性の空間、彼の言う「あらかじめ用意された語彙」を使用する傾向を越えて行くことを可能にすると。Alfred Markey; Troubles and Trauma Revisited: Sean O'Faolain, Edward Said and The Anti-Colonial Tradition (Revista Canaria de Estudios Ingless, 68; April 2014, 83-95)

最初の頃に述べたオフエイロンの自由で民主的な共和主義<sup>リパブリカニズム</sup>にもかかわらず、その後のアイルランド社会の変化で必ずしもその立場を貫くことにはならなかった理由は様々考えられる。ケントの序文の締めくくりではこの面の最大のものにデ・ヴァレラを引き継いだショーン・レマス内閣の外資導入政策を上げている。(1958 年)

このマーシャル・プランに沿った方針が冷戦構造にアイルランドを引き込むことや、見返りなしの財政援助など期待できないことにふれ、彼を黙認したオフエイロンの、「デ・ヴァレラの孤立主義に似たものは何でもすぐに反対する傾向」との矛盾を指摘する。その立場からすればオフエイロンは世界が今やきれいに資本主義枢軸国と共産主義に二分された展望に立ち、帝国主義の栄光と力のヴィジョンを持った国家の政策に加担したという。…オフエイロンの自由主義もさらに問題적になり矛盾もより複雑になる。彼はいまだアイルランドに不在の部分が多い社会保障政策にも反対するようになる。「自動的反アメリカ主義」(Autoantimericanism)のエッセイではイタリアの貧困地域カラブリア地方の外資投入を弁護した。(20世紀初めのアイルランド土地改革法を反映したようなもの。)…さらには国家の専制には反対したが、超国家的資本主義のもっと不法な影響には盲目になることがあった。彼は社会の経済やその他の分野の政府による絶対的規制が可能と信じていたようである。(Kent p.xxxi-ii)

第二次大戦後のアメリカのマーシャル・プラン1947-1952(欧州復興援助)についても当初の無償性が一皮むけば冷戦構造でのアメリカの利益となる反共同盟づくりであったのが明らかになるし後半ではアメリカの過剰な農工業生産物の販売先として、巨大な利益を見込むようになったという指摘もある。

1930年代から1940年代にかけてのオフエイロンの変身を第一とすれば、これは第二のそれかもしれない。人によってはオフエイロンの変身は40年代初めに既にあったというものもある。オフエイロンのスペイン戦争における左翼嫌いや、戦後のアメリカの援助受け入れ(53年のマッカーシー旋



風の魔女狩りなどにもかかわらず)などは将来を見通す彼の力の甘さの証明かもしれない。しかしレヴィジョニズムの場合と同じく多様な主張を包み込む共通の場の模索は常に続く今一つの例かもしれない。あるいはイギリスの植民地収奪の過酷さに比べればアメリカははるかに寛大な盟主だったと考えたのかもしれない。いずれにしてもこれらの従来のオフエイロンのスタンスからの脱落は、彼の生まれ育った風土の地理的・時代的条件から彼もついには逃れきれなかったことであろう。

この文脈でもう一点指摘しておくべきはレヴィジョニズムの延長にポストコロニアリズム批評があることである。一例を挙げておけばアンドリュー・キンケイドの Clare Carroll & Patricia King eds; *Ireland and Postcolonial Theory* (Univ. of Notre Dame P. 2003) の書評である。そこで論じられているのはアイルランドの植民地からの独立とその成功例を他の被植民地独立の物語にどれだけ適用できるかの問題である。これは独立の手段に武闘をどう評価するかの問題がある。アイルランドが脱植民地の成功例であっても、それがアフリカやアジアの他の脱植民地闘争の先行パターンとしてどう寄与するかの問題である。レヴィジョニズムからポストコロニアリズムへと文化論の進展の多様性と急進性をうかがわせる議論に思える。(cf. Eoin Flannery; *Irish Cultural Studies and Postcolonial Theory – Postcolonial Text* vol.3 no.3, 2007)

また脱植民地後の繁栄の基礎に「課税回避」<sup>タックス・ヘイヴン</sup>的手段による外資導入をどう評価するかの問題も含まれる。課税回避は一国の利害だけを考えれば有効であっても、他の植民地を踏み台にして大国の利害に追随する手法であるのはますます明らかになってきている。これには英語第二言語とIT産業の問題も絡む。今日の大国だけの世界支配に協同するか、小国の民主的連合を強めるかの二つの流れがせめぎ合っている中での難しい選択がこの文化研究の一つの課題になっている。最近の話題の一つにアメリカ経済の牽引車である情報産業の「合法的税逃れ」に世界の批判が集まってEUでもイギリスでもアマゾン、フェイスブック、グーグルなどに公正課税を実現するデジタル税の動きがあるという。これに日米財界が抵抗しているというのはすぐ理解できるとしても、アイルランドの脱植民闘争の中でオフエイロンのような困難に直面して人はどんな選択をするか他山の石の教訓は大といわねばならない。文学(文化)研究の古くて新しい課題の自己を慎む視線の構築はまだ生きているように思う。(cf. *Journal of Interdisciplinary Celtic Studies* Vo.1; 4-9, Aug. 2005)

3) ある作家の経歴を知るとはその人物や作品を通して、自我分析の歴史をたどることであり、それから学ぶのは古典的英知の最たるものである。しかし他者から学ぶのと同様して他者の発見と自己の比較も生じてくる。そのより豊かな自我の対象化の目とはむしろさらなる困難の道かもしれない。

野谷啓二氏はシェイクスピアの『ペリクリーズ』を下敷きにして書いたT.S. エリオットの「マリーナ」と言う詩を論じて次のように述べている。

「キリスト者となったエリオットの文学的関心として、心惹かれるのは recognition scene である。…人間が他者、自分以外の存在との『かかわり』の中で発見する『認知』であり、究極的には『死』の発見か『生』の発見しかないという人生理解である。」(野谷, 217)

この「自分以外の存在」とはキリストあるいは神かもしれない。しかし一足飛びにその信仰の場に飛び込まなくともより現世的な対処の教訓としても読める。この己をただす原理の導きに人は理想を求める自我を考えることも可能である。例えば様々な差別や不正にあふれた社会の中で人間らしく生きる意味を問い続ける、それが不幸への抵抗力、正しい判断、正確な言葉の使用への心がけを促すこともある。人はなぜ誘惑に負けるのかの問いかけも然りである。

朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり(『論語』里仁 24)

過ちに気付くことはそれを正す勇気を生み出す。オフエイロンも自分の過ちを修正することを恐れなかった。その衝動を生み出すきっかけは人さまざまであろう。筆者とオフエイロンの関係で言えば、文学を読むことに「喜び」があるとするオフエイロン。『短編小説論』その喜びの一つは「発見」、知る喜びである。外国文学を読む特殊性に正確さ、注意深さ、文学的感受性などを養う訓練があり、辞書の引き方の不十分さ、文脈の理解の不十分さの自覚から自己の不十分さ、至らなさの認識に至る。そこからより高いものへ、より完全なものへの憧れに目覚め、他者への寛容さを身に着けることができる。今回の全集翻訳で出会った幾つかの例を紹介して本論の終わりとしたい。

1) colloquial これらはあまりに流動的な場合、通常の辞書には見当たらない。

... let him have it (*The Time of their Lives*, 67) 思い知らせる

... to stick to her guns (*One Fair Daughter and No More*, 410) 自分の信念を守る

... I was down in the mouth. (*I Remember, I Remember* vol II., 113) 元気がなかった

2) 比喩的表現

... you just tell him to put it (that old stuff) where the woman told the monkey to put the nuts (*Hymeneal*, 32)

= where do you want this ? 何の必要があるの。

(次回にフィルがその陳腐な話を蒸し返したら) 気取りなんかくそくらえって言ってやりなさい。

It would all have been hunky-dory if the cow hadn't pulled the teat out of the baby's bottle (*Foreign Affairs*, 282).

= excellent, no worries and everything going well

= 余計な手出しをしなくとも万事うまく行くわ。

... Small wonder that the hair on the back of my neck stiffened like a pointer's tail at the smell of game when I observed now that Liz, while glancing over her half-glasses (at me) in poorly-simulated surprise and rising from her escritoire, threw a crumpled ball of paper into her leather wastepaper drum, precisely as I had metaphorically done three months before when I despaired of my guessing about her row with Carl Carson. (*One Fair Daughter and No More*, 404)

…何の不思議もない、(ちょうど三か月前彼女自身とカール・カーソンとの喧嘩についての推測に絶望したときの比喩として述べた獲物を嗅いだ時の首の後ろの髪が逆立ったという表現と同じように。) ... had metaphorically done の意味の理解が不十分だった。

### 3) 詩的表現の具体化

She patted the little man's hand and left him, fearing that if she let him talk on even his one little piece of sincerity would prove to be a fantasy, ...

(*Lovers of the Lake* vol. II p36)

His older, her more recent club acquaintances chewed a clearer cud. They said next to nothing but their tone was enough. Another of those waxwork effigies that manage somehow or other to get past the little black ball into the most select clubs. Mimes, mimics, fair imitations, plausible impersonations of the real thing, a procession of puppets, a march of masks, a covey of cozens, a levee of liars; chaps for whom conversations means anecdotes, altruism alms, discipline suppression, justice calling in the police, pleasure puking in the washroom, pride swank, love lust, honesty guilt, religion fear, patriotism greed and success cash.

サロンに集う小市民の軽薄さと、付和雷同性と、虚栄心を列挙している。

(*An Inside Outside Complex* 231)

Even to look at they were a mismatch: the doctor straight and spare as a pear, radiating propriety from every spiky bone of his body, as short of step as a woman, and as carefully dressed from his wide-brimmed bowler hat to the rubber tip of his bottled, gold-headed Malacca cane; the poet striding beside him, halting only to swirl his flabby tweeds; his splendid hydrocephalic head stretched behind his neck like a balloon; his myopic eyes glaring at the clouds over the roofs through the thick lenses of his glasses; a waterfall of black hair permanently frozen over his eye his big teeth laughing, his big voice booming, he looked for all the world like a peasant Yeats in a poor state of health.

(*Falling Rocks, Narrowing Road, Cul-de-Sac, Stop*, 292)

これは詳細で正確で、リアルであるが、いささか雄弁すぎる。

同じ文章と一緒に読む友人の存在が問題の持続性と関心を高める。認知症の予防には「社会性」(話す仲間)の維持が健康食品や、運動などより効果的と言う話もある。また今回のように自分の仕事に関心を寄せる人たちの存在を確認して、さらに前に進む勇気を与えられる。さきに『華開く英国モダニズム・ポエトリ』の中のシェイマス・ヒーニーを追悼した文章で、彼が授業や講演を準備する苦勞と引き換えに学生や聴衆から受ける感謝や賞賛が大きな刺激になったことを読んで、講演者と聴衆の弁証法的関係を指摘した。つまり要求された課題に応える話者の努力が強まれば、次

には、聞き手はさらなる高度な要求に目覚め、話者はそれを満たすべく更なる研鑽を進めるものと。今回の与えられた機会をこの理想の状態にできたかどうかは心もとない。しかしそのような努力目標を持ち続けたいというのが今の私の心境である。

## 引用文献

- Brady, Ciaran ed., *Interpreting Irish History: The Debate on Historical Revisionism*. Dublin: Academic Press, 1994.
- Delaney, Paul, Sean O’Faolain—Literature, Inheritance and the 1930s. Irish Academic Press, 2014.
- Kent, Brat ed., *The Selected Essays of Sean O’Faolain*. McGill-Queens U.P. 2016.
- Markey, Alfred, ‘Revisionisms and the Story of Ireland: From Sean O’Faolain to Roy Foster’ *Estudios Irlandeses*, Number 0, 2005, 91-101.
- 野谷 啓二『オックスフォード運動と英文学』開文社 2018, 217.
- Revista Canaria de Estudios Ingless*, 68; April 2014. 83-95.